
短編：深大寺恋物語

T-99

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編…深大寺恋物語

【Nコード】

N4312Y

【作者名】

T-99

【あらすじ】

深大寺恋物語に応募して見事落選した作品。4つの短編です。

01 真（まこと）

「そば食べにいかないか？」

真は笑いながら話しかけてくる。

真とは、大学の入学オリエンテーションで一緒になった。小柄な真が、体育会系のクラブの強引な勧誘に困っている所を、たまたま呼び止めて助けた。ほっとけなくてとっさに取った行動で特別な意味はなかった。

それから真は一方的に話かけてきては俺を連れまわすようになった。

「とにかくおすすめ、一度食べておけ」

真の声を聞きたびに、忘れかけていた心の感情が湧き出てくるのを感じる。

「いらっしやいませ」

水車のあるそば屋の暖簾をくぐるとにぎやかなかけ声が店全体に響く。席につくなり真は、メニューも見ないで手際よく二人前のそばを注文した。無愛想な店員が消えた所で真は切り出した。

「あれボクの妹、沙紀」

驚いた俺に目もくれず、ひょうたん型の七味を楽しそうに手のひらで転がす。

「沙紀が心配で店に来ていたら、ここの味がすっかり気に入ってね」そばを食べている間も、妹の事や家族の事をうれしそうに話す。今日の真はいつにもましてよく喋る。どうやら機嫌がいいようだ。

そばをすっかりたいらげると、思いだしたかのように真は言った。「そうだ、行きたい所があるから付き合ってくれ」

いきなり席を立った真を見て「またか」俺はそう思ったが、真はお構いなしに近くにあるお寺に向かう。その顔に先ほどの笑みは消えていた。

「深大寺？」

俺の問いかけに真はうなづく。

「願い事をすれば叶うと沙紀が教えてくれた」

両手を合わせ真剣に祈る真の姿に、思わず吹き出しそうになり何を願ったのか知りたくなった。

「何を願ったんだ？」

「恋が叶うように」

「へー、お前好きな奴いたんだ」

「ああいるさ」

俺という時、女の話なんか全くしたことない真の突然の恋話に興味がわき急ぎ立てるように続けた。

「だれだそいつ」

「お前だ」

「……………」

「お前が好きなんだ」

「……………」

「こっちは勇気出して言ったんだ、なんとか言えよバカ」

恋、そして告白。相手がまさか俺。あまりの展開の速さに頭が混乱していた。十八年間生きてきて告白なんてされたことなかった。

そんな俺が好き？ でも真は男で、確かにほっとけない存在で、いつもそばにいて、おちつけ俺。だめだ、だめだ、何を考えている、いまのは取り消せ。心の中は制御不能で暴走しはじめていた。

「誰か好きな奴いるのか？」

真っ赤な顔で見つめる真に対して、やっと出てきた俺の声は、ひどくあたり前のなさけないものだった。

「そんな風に考えた事なかった……ごめん」

「そうか、そうだよな、ボクなんか」

うつむいたまま真は、いままで一度も見せたことのない表情でありつつだけの思いをぶつけてきた。

「だったらなんで助けたんだよ。優しくなんかしたんだよ。」

「だからあれは」

「うれしかったんだ。本当に、ナイトみたいに現れて」

真のいまにも枯れてしまいそうな声に、想いに何も答えられなかった。言えなかった。真は泣いていた。いつも笑っている真が泣いていた。無言のまま立ちつくす俺に、涙も拭かず真は泣いていた。

真の告白の後、どう接すればいいかずと悩んでいた。話す機会は何度かあったが俺は真を避けていた。

そば屋に行った事を後悔したが、同時に真の気持ちを考えると、二人の関係が長続きしないことも明らかだった。遅かれ早かれ均衡は破られる運命にあった。

「俺は、あいつの事どれだけ理解していたのだろうか？」

キャンパスで真をみかける度に深大寺の記憶がよみがえり、ますます真を避けるようになった。

話しかける勇氣も言葉も見つからないまま季節は過ぎ、気づけば内定が決まり、大学を訪れる機会もいなくなっていた。

卒業式の朝、俺はそばを食べに行った。あれからもここにはよく足を運んだ。真の言う通り癖になる。いや忘れられない味になっていた。

「卒業式は午後からですか？」

真の妹とは、話をするようになっていた。無愛想なのは、真がいたせいだったのか、気軽に話かけてくれる声が真を思い出させる。

「卒業式の前に食べたくなってね」

そばを注文し、俺は窓越しの水車を眺めていた。水車はゆっくりと羽を回しながら水を送り出してゆく。

「今日で最後？」

「ああ、卒業式の後ここを離れるんだ」

「それなら式の前に姉に会って下さい。ダメならせめて声だけでもかけてください」

いつもと違う声に圧倒されつつ、会話の中にふと登場した「姉」

というフレーズが引っかかり俺は聞き返していた。

「姉って誰のこと？」

「まことちゃんです」

「真ちゃん？」

「ふざけないでください。姉はいつも男の子のような恰好していますけど、正真正銘の女の子です。いまでもあなたの事を私に話してくれます」

雷に打たれたような大きな衝撃が俺の中を駆け抜けていった。

「待ってください」

叫ぶ声も聞かず、俺は外に飛び出していった。携帯に覚えている番号をはじきながら深大寺に向かって走って行く。

「もしもし」

懐かしい声が聞こえてくる。

「真、いやまこと、直接会って話したいことがある。深大寺に来てくれないか？」

とにかく俺は謝りたかった、あの日のあの時のすべてを、気持ちを伝えないまま別れるなんてできない。離れるわけにはいかない。

「俺、女の子と思ってなくて、君を傷つけて、それでも君に魅かれていて……」

「それで」

まことの声は穏やかだ。携帯では気持ちを伝えられそうもない。だけれどいま、伝えないともう二度と会えない気がした。

「時はもどせないけど、もう一度……」

うまく言葉が続かない。気持ちばかりが先走り肝心な事が伝えられない。もどかしさばかりが募る。

「もう一度なに」

聞き返す声にかすかな望みをかけたい。着慣れないスーツの上着を脱ぎ捨て、ネクタイを緩めると、俺は大きく息を吸い込み、空を見上げながら瞳を閉じ願った。

「もう一度許されるのなら、この気持ちを伝えるチャンスをお願いします」

その刹那、風が木々を吹き抜けてゆき、葉の触れ合う音の中で桜の花びらが舞い、光が温かく体を包むのを感じた。携帯を胸に当てたまま俺は目を開けた。

「まこと？」

肩まで髪を伸ばし、薄紅色の着物を着た、まことがそこにいた。

長い裾を恥ずかしそうに押えながらまことが近づいてくる。

「なんとか言えよ」

「似合ってる」

まことが近づいてくる。

「聞こえない」

「好きだ」

俺はまことに駆け寄り、力いっぱい抱きしめていた。

「沙紀の言った通り」

まことの声が心地いい。願いは届く、思いはきっと伝わる。俺はやっと、まことという時いつも湧き上がる心の感情を理解することができた。

すると二度と離したくない俺の気持ちを察したかのようにまことが呟いた。

「ところでそろそろ離してくれないか、卒業式に遅れる」

照れながら微笑むまことの耳もとにそっと俺も呟いた。

「着物もいいけど、フリルの付いたミニスカート姿も見たいな」

「気が向いたらな」

気持を見透かしたのか、俺の問いかけをさらりとかわし、まことが手を取り引っ張っていく。

止まっていた時間が動きだすのを感じながら、まことの手を強く握り返し、俺は静かに歩き始めた。

02 かすみの恋

運命を信じますか？

気まぐれな神様が尋ねれば、かすみはおそらくNOと答えるだろう。

高校を卒業して電子系の専門学校にかすみは通うことにした。

ITやコンピュータに特別な興味があったわけではなく、「自宅から数分で通えて便利」というシンプルな理由からだった。心配性の両親を説得するにも役立った。一言こう言えばいい。

「海外留学するよりいいでしょう」

専門学校の授業は退屈なものだった。特にカリキュラムと並行して取り組む研究課題は面倒くさく感じた。テーマは、「ITの活用による地域社会の……」以下省略。かすみは、難しいテーマに泣きだしそうになったが、頭のいい友人いわく、「学校の用意したホームページ作成ソフトでホームページをつくればいい」ということらしい。ホームページが地域社会にどう結びつくのかピンとこないかすみだった。だが、一応やるべきことがわかり安心した。

そんなわけで、かすみはホームページを立ち上げるという基本的な作業に取りかかったのは、アップロード期限の前日という、試験勉強一夜づけさながらの遅いスタートだった。

調布市はかすみ生まれ育った町、名所をピックアップしてホームページを更新していく作業は楽しかった。サイトの中で、神代植物公園に力を注いだ。「かすみは絵の才能がある」と絵画好きの両親が、幼い頃何度も絵を書くのに連れていってくれた。残念ながら一度も賞を取ることはなかったが、帰りに家族で食べる蕎麦の味

は、今でもはつきりと思い出すことができた。その時、かすみの中で何かがひらめいた。

深大寺蕎麦マップをつくろう。深大寺周辺にある全ての蕎麦屋をめぐり店の味やおすすめメニューを載せていく。ホームページ上で独自の点数を☆の数で表す。他店との違いを書いたら面白いかもしれない。改善点やいろんな人の意見も参考にしつつ、深大寺蕎麦のナンバーワンを決める。かすみは次から次に湧き出る考えに驚きながら、実現に向け寝る間も惜しんで作業に没頭していった。

好きこそものの上手なれとはよくいったもので、深大寺蕎麦マップは順調に仕上がっていった。かすみは、専門学校が終わると蕎麦屋に足を運ぶ。一杯目は二杯目よりおいしく感じてしまうので「一日一軒一杯」を目標に店のおすすめの蕎麦を食べた。

データも徹底して集めることにした。蕎麦の味はもちろん、店の外観から始まって接客態度、はたまた勘定にいたるまで一瞬たりとも見逃さないように細心の注意を払った。熱心に取り組むうちに、かすみのホームページのアクセス数はうなぎ登りに増えていき、専門学校内だけでなく、地方版の新聞の記事になるほど深大寺蕎麦マップは有名になっていった。

有名になることは、批判や中傷的な書き込みやメールも増えていくこと意味していた。「偉そうにいうな」「蕎麦の何をしっている」など、かすみにとって厳しい内容もあった。もちろん励ましや応援、そして率直な意見も数多くよせられた。

「ハンドルネーム・カメ」ことカメさんは独特の文書でかすみを励ましてくれた。ホームページに乗っていない蕎麦屋のこと、裏メニューの注文の仕方といったさまざまな情報を教えてくれた。かすみは、情報の量と正確さに感心するばかりだった。

カメさんは写真もかすみに送ってくる。写真はどれもアングルや採光がずば抜けていて、特に蕎麦を写したものは、湯気や匂いまでこちらに伝わってきそうで、蕎麦を食べたい気分毎回させられた。

最初のうち、かすみにとってカメさんからのメールは情報をもたらし、深大寺蕎麦マップを改善していく為のものにすぎなかった。そのメールがいつしか趣味や共通の話題を探すことに移り、カメさんをもっともっと知りたいという気持ちに変わっていった。

「カメさんはどんな人だろう？」

かすみは、メールだけでなく実際のカメさんに会いたくなった。

会いたい思いがかすみの中で加速していくと、強い衝動は抑えが利かなくなり、かすみはカメさんを好きになっていった。こうなるとやっかい、「思いを伝えることが人生の生きる意味」とまで思い始めていた。深大寺蕎麦マップを口実に、カメさんと会うことも考えたが、断られてせっかくの関係が壊れてしまうのもいやだ。なかなか踏ん切りがつかないで悩んでいると、またしてもかすみの中で何かがひらめいた。

そうだ、オフ会をやろう。「一期一味会」として蕎麦好きの人の意見交流の場を提供する。これなら沢山の人が集まるからカメさんも来るに違いない。アイデア実現の為、かすみは蕎麦屋に貸し切り依頼をかけ、ホームページに交流会の告知文を載せると、お知らせメールを一斉に配信した。

一通り必要なことを終えると、かすみは握りしめた右手を高々と頭上に掲げ気合を入れた。

「勝負は次の日曜日、午後五時、蕎麦屋栄栄」

日曜日はあいにくの雨模様だった。天気のせいがかすみは、前

日に決めた服が突然いやになり、再度服を選び直した。選び直した服のせいで、帽子や靴なども決め直す。結局かすみはコーディネートに悩み、集合時間ぎりぎりに到着する事態に陥った。

蕎麦屋栄栄には既に人が集まっていた。事前参加人数が二十人程だったので、急きよ呼びかけた割には人が集まった方だった。慣れない挨拶やこれまでの深大寺蕎麦マップを作る経緯を話すことで、かすみは主催者として責務を一応果たし、お役御免となった。

各テーブルでは、めいめいがお気に入り蕎麦を注文し、互いの自己紹介や蕎麦談義に花を咲かせていた。かすみは参加者の中でカメさんを探していた。もちろんおおよその目星はつけていた。参加者のほとんどは事前のアンケートと称し、メールのやり取りをしてカメさんでないことを突き止めていた。出席者の中で、専門学校の知り合いを除けば残りは三人しかない。その三人を主催者の特権を使い、かすみは同じ円卓のテーブルにセッティングしていた。

「カメさんは誰か？」かすみは分析していた。本命はかすみの真ん前に座っている大学生の彼、なかなか男前で好きなタイプ。対抗は右隣の白髪のおじいちゃん、名札が亀山となっているのでほぼ確定か？最後に左隣のインテリ風の男性、年齢が三十前後で結婚指輪はなし。

かすみは、いよいよ運命のルーレットを回す決意を固め質問を投げかけた。

「カメさんは写真がとても上手ですね」

「本当にそう思います」

大学生の彼がまず答えた。

「そうそう、私も写真を拝見する度、感心するばかりです」

インテリ風の男性が続いた。ここでかすみは確信した。「亀山さんがカメさんだ！」想像していたカメさんとは違っていただけ、会うことができた。カメさんは誰よりもかすみを理解し応援してくれた人。くじけそうになったときいつも励ましてくれた人。カメさんに会わなかったら気づくことのなかった数々の出来事をかすみは

思いだしていた。思い出していくうちに目から自然に涙があふれてきた。それを見ていた亀山さんがそっとグレーのハンカチを差し出す。この優しさこそやっぱりカメさんだとかすみは感じた。

「カメさんありがとう」

心からの感謝の気持ちを伝えたかすみに対して、亀山さんから以外な反応が返ってきた。

「私はカメではありません。カメは今入って来たあの子ですよ」

蕎麦屋の入口に立っている男の子を亀山さんが指さしていた。

「カメさん」

かすみが口にした瞬間、入口にいた男の子がかすみに向かって駆け寄ってきた。黄色のカップに黄色の長靴を履いた小学生ぐらいの男の子がかすみに飛びついた。

「かすみさんはじめましてカメです。遅れてごめんなさい。塾があったから、じいちゃんにかすみさんの相手頼んだけど楽しかった？」

元気のいい男の子はうれしそうに話すと、ポケットからデジタルカメラを取だしかすみに向けた。デジタルカメラに写しだされたかすみの姿は、別人の女性のように輝いて美しく見えた。

男の子は撮った写真をしばらく満足そうに眺めていたが、かすみの目が赤いことに気が付いて今度はいきなり大声で叫びだした。

「この中の誰？ ボクのかすみさんを泣かせたの、やっつけてやる」

かすみは、勇ましい小さなカメさんを見て思わず笑いだしてしまった。笑い声はやがて参加者全員に伝染していき、店全体を暖かく包みこんでいった。

03 彼と猫

人生を振り返り、雪子は幸せだったのだろうか、ふと和男は考えた。

彼は頑固な男だった。しかし、地方銀行の支店長になるほどの仕事熱心な男でもあった。

春に銀行を退職した彼に残された財産は、平屋建ての古びた自宅と、車検前に廃車を考えている銀色のセダンが一台あるだけだった。

妻の雪子は半年前に他界した。息子の達也も独立して今は一緒に住んではない。特別な趣味もない彼には毎日をどう過ごせばいいかわからず、考えごとをする機会が多くなっていった。

彼は雪子が亡くなってから、世話をする者がいなくなった庭を、全てコンクリで覆ってしまった。灰色で覆われた場所には物置が置かれている。物置には十センチあまり通風用の隙間が設けられ、そこから物音が聞こえてくることにある日彼は気が付いた。

つかかけを履き、音のする方に腰を落とし覗いてみると、そこには真っ白な子猫がいた。生後二週間ぐらいの子猫は、小さい声で鳴き、彼が手に取り抱き上げてみると、子猫の鳴き声がいつそう大きくなった。親猫がそばにいるかもしれないと彼は物置の下や、あたりを見渡してみたが親猫の姿はどこにもなかった。動物好きではなかったが、ほっとくわけにもいかず、彼はミルクを与えて様子を見ることにした。梅雨も明けない六月の出来事だった。

物置の下で見つけた白い子猫は、彼に何度も甘い声ですり寄ってきた。初めのうち彼は、子猫が親猫に見捨てられ可哀想だと思って

いた。前足と背中を伸ばし、あくびをする姿を日に何度となく見ていくうちに、彼もしだいに子猫に愛情を感じるようになり、子猫は天からの贈物と考えるようになった。

彼は子猫の名を「ユキ」に決めた。真白な色と妻雪子の名前にちなんで彼はそう呼ぶことにした。ユキはとてもやんちゃで、家の中をとびまわっては、彼の愛用してきた木製の机や栗色のソファを何度も噛んだり、ひっかいたりしてすぐにボロボロにした。増えていく傷を見ると、彼は逆に日常に変化や発見をもたらしてくれるユキの行動に楽しみを感じるようになった。

彼がユキを飼いはじめてから数週間が過ぎた。いつものようにユキは、お気に入りのタンスの上で丸く小さくなっていた。彼は買い物袋を下げて帰ってきた。

「ただいま」

ユキは嬉しそうに声をあげ彼のもとに飛びついてきた。ユキがタンスから離れた時、一枚の写真が彼の前に落ちてきた。畳の上に落ちた色あせた写真を拾って見ると、それは昔彼が撮ったものだった。彼の妻雪子と息子の達也が並んで立っている。達也は合格祈願の絵馬を指さしていた。深大寺に達也の高校合格を祈願して、家族でかけた時のものだった。懐かしく彼が写真を見ているとユキが小さく鳴いた。

「ごめん、お前を忘れたわけではないよ」

彼が話かけてもユキは怒っているように繰り返し鳴くばかりだった。

「なんだ、写真を撮ってほしいのか？ それなら今から深大寺に撮りにいくか？」

ユキはようやく彼が理解してくれたといわんばかりに彼の左足にすり寄った。

彼は押入れの中から使っていなかった一眼レフカメラを取だし、

地図を広げ深大寺までの道筋を確認すると、買物袋もそのままにポケットに例の写真を大事に入れ、ユキに声を掛けた。

「ユキ、日が沈まないうちにでかけるよ」

愛車のセダンの助手席にユキをのせると彼はユキに優しく話しかけた。

「シートベルトはしなくていいからね」

深大寺に向かう間、彼は雪子のことを考えていた。雪子は亡くなるまで、彼に文句一つ言ったことのない女だった。風呂に何時に入るといえばその通り沸かしていた。急に会社の同僚がくればもてなす。いろいろわがままを言ってきたが、すべて彼の言う通りにしてき女だった。旅行に連れて行ったこともなければ、物をほしいとねだったこともない。趣味といえば庭の土いじりだけ、その庭も今は冷たいコンクリに覆われている。

雪子が生きていれば、退職後に熟年離婚も彼にはあったかもしれない。雪子はしたいことをどれだけ我慢して彼につくしてきたのだろうか、彼は考えてはみたものの、もう知る由もなかった。ただすまないという思いだけが何度も彼の心を支配するだけだった。

「妻は私のことを愛していたのだろうか？」

古い蕎麦屋の並ぶ道をぬけ、バスが止められる広い駐車場の先に古刹深大寺はあった。

平日にもかかわらず多くの人が訪れていた。彼はユキをあらかじめ車に積んでおいたバスケットの中にいれ、緑色のハンカチをそつとユキの体にかけた。

彼は過去の記憶を思い出しながら、石畳の続く本堂までの道を歩き始めた。歩く間、バスケットの中から、ちよこんと首を出すユキの姿にすれ違う人たちは皆うれしそうに微笑んだ。実際ユキは、彼

がびっくりするほどおとなしく、鳴き声ひとつたてなかった。この所の雨で外にでなかったユキにとって、久しぶりの外出だったが、よほどバスケットの中が気持ちいいのか、本堂に着く頃にはユキは眠りについていた。

彼は写真の場所をすぐに見つけることができた。本堂の横に沢山の絵馬が並べられている場所が写真に写された場所だった。だるまの絵がかかれた絵馬に、たくさんの人達が願いごとを書いていた。彼は写真を撮りにきたはずだったが、肝心の被写体が眠ったままで起こすこともかわいそうになりバスケットを抱えたまま本堂に向かった。

本堂の古い柱や壁に彼は歴史を感じた。軒の先端から光が差し込むのを見て、彼は本堂の屋根を見上げた。夕日に照らしだされて輝く本堂は美しく、彼は心を奪われた。

やっと目が覚めたユキと一緒にしばらく本堂を眺めることにした。彼はカメラを撮るのをやめてしまっていた。この風景は心に留めておくべきものだと思っていた。この風景は心に留めておくべきものだと思っていた。

「ユキ、写真は今度撮ろうな」

彼がユキに話しかけるとユキは体を起こし、バスケットから出ようと前足をカゴの端にかけた。彼はユキをバスケットからだしてやると、ユキは夕日の差し込む方向にまっすぐ走り出した。

「ユキだめだ、もどっておいで」

彼の言葉も届かないのか、ユキは絵馬のある場所に走っていった。彼は慌ててバスケットを地面に置きユキを追いかけた。

ユキは絵馬の並べられている場所に座っていた。昔、彼が妻と息子を撮った思い出の場所に座って彼を待っていた。

「なにしている、写真を撮ってほしいのか？」

彼は少し呆れ気味にカメラを取り出すと、ファインダー越しにユキを見た。彼は被写体が子猫ということを忘れて、あの写真と同じアングルで写真を撮ろうとしていた。

「ユキは小さいから屈まないといけないな」

カメラから目線を外すと彼は呟いた。今度は腰を屈めて彼はもう一度カメラを覗き込む。ファインダーの真ん中にユキがいて、たくさんさんの絵馬がユキの後ろにまるで幾何学模様のように並んでいる。絵馬の言葉が写真に写りこまないように焦点をユキに合わせようとした瞬間、ユキが大きく鳴いて、彼の視線の中から突然いなくなった。オートフォーカスは、ユキから絵馬に機械的に焦点を変えた。消えたユキの替りに絵馬の文字がはつきりと彼の目に飛び込んできた。

『定年後も和男さんと一緒に楽しく暮らせますように 雪子』

絵馬の文字は四十年間見てきた妻雪子のものだった。彼は絵馬に近づき手に取った。文字の一字一文字から暖かさが伝わってきた。雪子がどうしてここに来て、この絵馬を残したのかは彼にとってどうでもいいことだった。退職してから今日まで、常に頭の中にあり悩み続けたその答えが絵馬に書かれていた。

「雪子、お前は本当にできた妻だった。ありがとう……。何もしてやれなかった私を許しておくれ」

こみあげる涙を抑えることができず、人前も気にせず、彼は絵馬を握りしめたままむせび泣いた。

やわらかいぬくもりが座り込んでいた彼の膝を優しくなでた。彼がかすんだ目で見るとユキが心配そうに彼を見つめていた。

「ユキ、ありがとう」

彼はユキに感謝の言葉を伝え、ユキを抱きかかえゆっくりと立ち上がった。ユキは体をよせ彼の心臓の鼓動を聞いているかのように目を閉じた。

「ユキ、庭に木を植えてみようか」

彼はユキに話かけると、これからの人生をどう楽しんでいくかを考え始めた。

04 なんじゃもんじゃの木の下で

少し効きすぎたバスの冷房が気になり、冷風の吹出し口に手を伸ばすと、隣の席に座っていた女性が、俺の手を遮るように停車ボタンを押した。

「次とまります」

運転席の上の電光掲示板に文字が写しだされると、バスは停留所に向け減速した。次のバス停で降りるつもりだった俺は、寒さは我慢し女性が通りやすいようシートに深く腰掛けた。

「約束までは時間がある」俺は、ポケットの中のコインを握りしめていた。

間もなくしてバスは到着し、乗車口のドアが開かれたが、隣の女性性は一向に降りる気配を見せない。不思議がる俺より先にアナウンスが流れた。

「お降りの方はお急ぎ下さい」

運転手の声に周りの乗客たちが、ざわつき始める。

俺はバスに響きわたる声で言った。

「すみません、間違えました。次の深大寺で降ります」

声に納得したのか、運転手はドア閉めエンジンをかけた。「どうして押し間違えた」と言えないのだろう、俺は呆れたが、麦わら帽子を膝に抱え、耳を真っ赤にした隣の女性を見て、それ以上考えるのをやめた。

バスから降りると、外は涼しかった。朝方まで降り続いた雨が、打ち水のように地面を湿らせほどよい空気にさせていた。

「深大寺はどっちですか？」

声のする方を見ると、ボタンを押し間違えた女性が立っていた。白いワンピースに麦わら帽子をかぶり小さな手帳を差し出す。手帳を見て俺はすぐに、手帳が深大寺スタンプリーの台紙だと分かつ

た。

深大寺の境内に設けられたチェックポイントで、クイズに答えスタンプを押してもらおう。スタンプを五つ集めると記念品がもらえる。記念品といってもただの銀色の記念メダルで、子供が楽しみながら深大寺の歴史を学ぶイベントに過ぎなかった。

「あっちです」

俺は降りてきたバス停をさしたが、彼女は依然立ちつくしたままだ。仕方なく、彼女を深大寺の山門まで案内した。

彼女の名前は楓と言った。記念メダルがほしくて深大寺に来たらしい。楓はスタンプラリーの台紙をめくりながら、俺の年や名前など、いろいろ聞いてきた。初対面の人に話すのは苦手だが、知り合いになったとたんよく喋る人がある。楓はそんなタイプに見えた。

「隆くん的高校、今日はお休み？」

「ああ」

俺はぶっきらぼうに答えた。楓はすっかり打ち解けたと思ったらしく気軽に尋ねた。

「暇ならスタンプラリーにつきあって」

俺は楓の申し出を聞き入れ、一緒にスタンプをもらうため、クイズの答えを求め境内を歩きまわっていた。

クイズといっても三択問題、問題文をよく読めば答えがわかる仕組みになっている。

「隆くん、最後の答えは？ 番かな」

「違う？ 番、本当に大学生？」

俺の答えを聞き、楓はスタンプを押す係員の所に答えを言いにく。俺は正解を全て知っていた。

最後のスタンプを無事もらえた楓は、俺の所に戻って来て、スタンプで埋め尽くされた台紙を開いてみせた。

「あとは記念コインをもらうだけ」

楓は、本堂の横にもうけられた受付を目指して歩みの遅い俺を急かせた。「大学生にもなって、記念コインをもらってうれしいのだろうか？」受付のテントに入ってもなお興奮気味の楓は、列の一番後ろに並び、順番が来るのを待ちきれないでそわそわしている。俺は日差しよけに、なんじゃもんじゃの木の下で楓の様子を眺めることにした。小さな子供たちの中で、楓の背丈だけが異様に飛び抜けて見えた。

子供たちが順番に記念コインをもらい、楓の番が来る。ところが、楓が何やら騒ぎ出したので、びっくりして俺は、受付のテントに走った。テント内では、楓が係員に詰め寄っていた。

「記念コインを下さい」

「前のお子様にお渡ししたコインが最後の一枚で、明日新しいコインが届きましたら、ご自宅に郵送致しますから……」

係員がいくら説明しても、楓は聞き入れず「コインを下さい」の一点張りであかない。

やがて楓は、先に記念コインをもらった男の子を見つけると、コインを譲るようにせがみだした。困惑した母親が男の子から記念コインを取り上げ、渡そうとしたものだから、男の子は大きな声で泣き出した。

俺は見かねて、母親と男の子に一礼し、楓の手を取り、なんじゃもんじゃの木まで引っ張って行った。

「恥ずかしく思わない、子供を泣かせて」

俺の言葉に耳もかさず、楓は不機嫌そうに横を向きこちらを見ようともしない。

「たかがコイン一枚で」

「彼に会うためにどうしても必要な記念コインなの」

ようやく口を開いた楓は話を続けた。

「なんじゃもんじゃの木の下で、十年後の今日、男の子と会う約束をした。そしてお互いが目印に記念コインを見せあう」

「子供の頃の約束？ 相手は忘れてる」

俺の言葉に楓は動じなかった。

「子供だから携帯も持ってなかった。連絡先もわからない。でも和也くんはきつと来る」

「いや、絶対に来ない」

俺は、コインを握りしめ断言した。

「なんでわかるの、知りもしないでいいかげんなこと言わないで、私の大切な思い出を壊さないで」

俺は知っていた。楓と約束した和也は来ない。兄貴は約束など忘れていたのだから……。

小さい頃、なんじゃもんじゃの木の下で会う女の子のことを、兄貴は何度も俺に話してくれた。

初めの頃こそ兄貴は、俺を深大寺のスタンプラリーに連れ出し、「十年間、記念のコインを集めて女の子に見せてやる」と息巻いていた。

そんな熱心な兄貴も、中学になる頃には約束のことなど忘れていた。

『子供の頃にした約束に、意味があるというのだろうか？』

意味などない。七夕の織姫と彦星でもあるまいし、約束を守り続けるなんてありえない、俺はそう思っていた。ましてや約束を守り、二人が出会う確率なんて、おとぎ話の世界だけだろうと決めつけていた。

『それならなぜ俺はここに来たのか？』

俺は十年間、兄貴の代わりに記念コインを集め続けた。記念コインを集めれば、女の子に会うことができるかもしれない、そう思い

たかった。女の子に会えるのなら、約束を守らなかった兄貴の代わりに謝ってもいい。奇跡を信じて俺はここに来ていた。

「受け取ってくれ」

俺は、大事なコインを投げた。コインは放物線を描きながら、楓の手のひらに落ちていく。

「記念コイン、どうしたの？」

「和也は俺の兄貴。兄貴は、約束を覚えちゃいない。だから……」
俺は楓にふかぶかと頭を下げた。

「兄貴のことは忘れてくれ。この通り」

楓が許してくれるまで、頭を下げ続けようと決めていた。約束を信じた楓に、俺ができるたった一つのことだった。

地面にいくつもの汗が落ちてゆくのを黙って見ていると、突然、俺の頬にコインの冷たさが伝わってきた。楓が俺の頬に手を当てていた。顔をあげ楓を見ると、楓がいきなり俺を抱きしめた。しっかりと力強く、それでいて包み込むような優しさで俺を抱きしめてくれた。

「ありがとう、伝えに来てくれて……」

つくつくぼうしが急に鳴きだし、夏の日差しが思い出したかのように照りつけると、楓は手をほどき、麦わら帽子を俺にかぶせてくれた。風にゆられて舞った長い髪を手で押さえながら楓は笑った。

「お礼をしたいから、今度会わない？」

やっと出会えた女の子の約束に、うれしくなり俺は目を細めた。

「十年後に会うのでなければ」

04 なんじやもんじやの木の下で（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4312y/>

短編：深大寺恋物語

2011年11月15日03時24分発行